

ビバハウス便り NO.71 大自然の中で、農業を中心に若者自立支援 10 年

青少年自立支援センター ビバハウス責任者 安達俊子

私たちが青少年自立支援センター ビバハウスを、2000 年 9 月 1 日にたち上げてから、10 年がたった。もともと私たちは、この仕事をするには大自然の中で、大自然の生命力の助けを借りなければ出来ない仕事だと思いこんでいたので、事業開始の決断をすると同時に、施設建設地を余市町郊外の、果樹園のど真ん中にある、NPO 法人余市教育福祉村（菊地大理事長）内に求めた。同法人の役員会でのご好意ある承諾を頂き、実質約 3 ヶ月の短期間で、中古プレハブでの施設建設を完了し、それ以来約 10 年間にわたる 365 日 24 時間のまるで「野戦病院」のような日々を過ごしてきた。この間、車で約 10 分でいけるマイホームには荷物を取りには行ったが、二人とも 1 泊もしたことがない。

私たちがなぜ大自然の中でなければならぬかと考えた理由は、俊子 35 年間、尚男 9 年間の北星学園余市高校での教師経験から得たものである。様々な傷を負いながら、それでも必死に過去の自分に決別し、新しい生き方を求めて北の大地に集まった若者たちを本当に癒してくれたのは、この余市の海、山、川、そしてすべての大自然に他ならないと気が付いていたからだ。

学校や下宿でのつらい出来事で苦しんでいる生徒たちは、毎日のように夕方の海に出向いて、じっと波の波動に見入っていたり、夕日の落ちる光景に心を洗われていた。また別の生徒は、学校の合間を抜けて、隣町のスキー場に毎日のように通っていた。町の真ん中に余市川を挟み、三方をなだらかな山なみに囲まれ、積丹半島からの強烈な北風を、屏風のように防いでくれるシリパ岬に守られて、余市の自然は、いつも穏やかに生徒たちの心を包んでくれていた。彼らの成長のほぼ 8 割がたは、この大自然の恩恵によるものではないか、それに比べれば、私たち教師の力などは本当にいつもたかが知れていると思知らされるような毎日でもあった。

10 周年記念日でびっくりするようなことが今年はいくつもあった。まず 9 月 1 日当日突然、喜茂別町の内藤副町長さんの来訪を受けた。菅原町長さんのご意向で、前日北海道新聞に載った「ビバハウス 10 周年」の記事を見られて、わざわざ余市までお祝いに駆けつけて下さったとの事。喜茂別町はすでに度々報道されているように、この 6 月から、全国から 10 名の青年を 2 年間役場の臨時職員として迎え入れて、限界集落に近い状況で暮らすお年寄りの生活を支援し、さらには町の再生に貢献してもらおう企画を実行している。「全道の限界集落へ大都会のニート、引きこもりの青年を国の責任で定着させよ！」とあらゆる機会に訴えている私たちの思いを先取りして頂いた喜茂別町に、いつかは第二のビバハウスをどうしても作りたいとの決意を固めた日だった。

元勤医協余市診療所の職員だった、山下厚二さんが創って下さった、全国の皆さんから喜んで頂いて来たビバハウスの HP の管理を、北星余市の卒業生の茂木勇さん（後志教材事務機販売経営）が引きついで下さり、「ビバハウス便り」の未掲載分すべてを一挙に掲載して下さいましたので、これも 10 年の区切りとしてぜひご覧いただければと願っている。